

2017年4月のアジア選手権で中国トップ選手3人を破った平野美宇、2018年の6月のジャパンオープンで同じく中国トップ選手を数名破り優勝した女子の伊藤美誠、男子の張本智和など、卓球では日本の10代の若手が世界で活躍している。日本は、1950年～60年代には世界のトップとして活躍したが、70年代に中国が文化大革命による欠場から復帰すると長い低迷時期に入った。その後、福原愛の出現により人気が回復し、2000年ごろからは日本卓球協会が主導した小学生の育成が始まり、その成果が近年の若手選手の活躍につながっている。

しかしながら、裾野が広がっただけで前記の3人が世界で活躍できている訳ではなく、理由は別にある。その秘密は彼らの打法にある。中国卓球では「弧線の理論」と呼ばれる考え方が基本にあり、速いボールを打つ際にもボールに回転を掛けて円弧軌道とすることによりミスが減らすのが良しとされている。一般的に中国選手は日本選手より身体能力が高いため、このように強い回転を掛けても速いボールを打つことができているが、日本選手がこれをまねても速いボールを打つことは難しい。

これに対し、平野や伊藤、張本に共通しているのは、「100 km/h に迫る速いボールを早いタイミングで打つ」

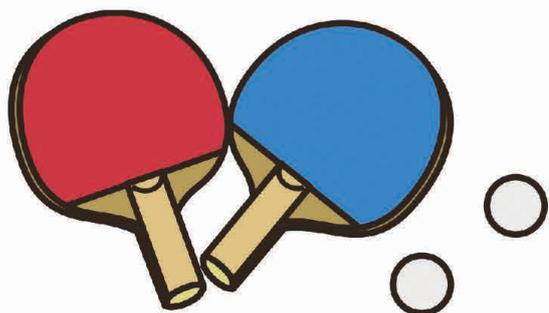
という点である。「速いボール」を打つとボールは直線的に飛ぶため相手コートに入る確率は低くなるが、相手は打球までの時間的余裕がなくなるため、対応が難しくなる。いわゆる「ハイリスク・ハイリターン」の戦術である。ミスをするリスクを低減するのがもう一つの「早いタイミング」という点である。台に近い位置でボールを頂点前で打つことにより、ボール打球点から相手コートを臨む角度が大きくなり、ボールが入る確率が上がる。このように回転よりもタイミングとスピードを重視した強いボールを打つことにより、相手に時間的余裕を与えずに安定してボールを入れることを実現している。台の近くで早いタイミングで打つには、自分自身もより速く動くことが必要であるが、動体視力、動きの速さに年齢はあまり関係がないため、中高生の年齢でも可能な戦法である。

今まで中国選手が行っていなかったハイリスク・ハイリターンの攻撃で日本若手選手は中国選手を破ったが、中国も黙ってはいない。アジア選手権で優勝した平野美宇は、その2か月後の世界選手権では完敗し、中国選手に1勝もできなかった。その裏には中国の徹底した弱点研究とそこを責める戦略、それを全選手に徹底させる組織力がある。これを可能にする手段の一つが「コピー選手」であ

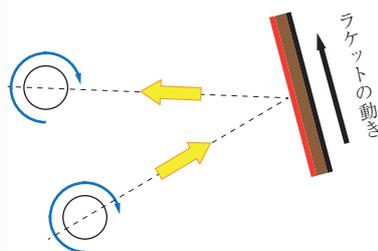
# 王者中国に挑む日本卓球

技術開発本部

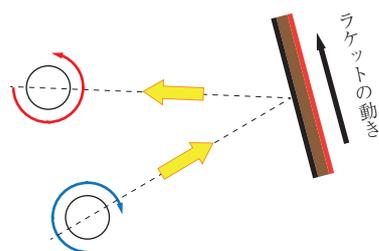
金澤 祐孝



(a) 粒高, アンチスピンラバー



(b) 裏ソフト, 表ソフトラバー



る。中国では相手国のライバル選手のコピー選手を育成して練習相手として自国代表選手の強化をする、という伝統が古くからある。コピー選手は国から指名され、プレーだけでなく、用具、しぐさ、髪型までもまねているという。平野美宇のコピー選手は4人もいるといわれているが、コピー選手自身が強くなり、代表選手になることもある。2017年の世界選手権後のジャパンオープンで当時世界3位の中国強豪選手を破って優勝した孫穎莎は平野のコピー選手の一人といわれている。

中国卓球の強さの秘密はコピー選手だけでなく、その技術開発力にある。この50年の間に卓球の用具、打法などの技術は大きく進化した。その多くは中国によるものである。

卓球はボールのスピードと回転量が重要であるため、ラバールの開発は、より速い球速と回転量増大を求めるものが主流であったが、1970年代になると自ら回転を掛けるのではなく、相手の回転をそのまま利用する特性をもつラバーが開発された。

このようなラバーには、粒高ラバーと呼ばれるものと、アンチ（スピン）ラバーと呼ばれるものがある。粒高ラバーは見た目が一般的な表ソフトラバーと似ており、アンチラバーは裏ソフトラバーと見分けがつかない。これらのラバーは原理は異なるが、いずれも相手の回転をそのまま残す性質があるため、相手にとっては逆回転のボールになる。すなわち、自分がドライブを打つと相手のボールはカットで返ってくる。

粒高ラバーを世界レベルの大会で最初に使ったのは1974年に行われたアジア大会での中国の梁文亮であり、その翌年の世界選手権で複数の中国選手がこのラバーを使い男女団体で優勝した。アンチラバーで最初に世界選手権で活躍したのは1980年代の中国の蔡振华である。蔡振华はシェークハンドラケットの両面に同じ色の裏ソフトラバーとアンチラバーを貼り、サーブ時やラリー中にくるくる回して打球したため、相手はどちらのラバーで打ったの

かわからず、ミスを連発した。

しかしながら、世界選手権での蔡振华の活躍後に、この戦法はフェアではない、卓球の面白みを奪うとの批判が上がり、その後両面のラバーは異なる色にするようルールが改正された。ちなみに、この蔡振华はその後中国の卓球協会の会長になったばかりか、バドミントン協会会長も兼務し、さらには近年サッカー協会会長も兼務している。アイデアマンが中国をサッカー強国にする日も近いかもしれない。

卓球の試合はサーブから始まるが、自分の投げ上げたボールを打つサーブは自由に回転、スピードを制御できるため、1球目攻撃として重要である。卓球の試合を見ると、多くの選手がボールを高く投げ上げてサーブを行っているがなぜだろう？サーブの回転、スピードはラケットとボールが当たる時の相対速度で決まる。すなわち、ボールの速度が一定であれば、ラケットの速度を速くすると回転が掛かり、スピードも出る。しかしながら、ラケットの移動速度には限界があり、それ以上の威力を出すには、打球時のボールのスピードを上げる必要がある。これを実現するために開発されたのが、投げ上げサーブである。例えば、ボールを20cm投げ上げた場合の落下速度が約2m/sであるのに対し、5m投げ上げると約10m/sに増すため、ボールを高く投げ上げることにより強い回転、スピードを与えることができる。この投げ上げサーブを世界レベルの試合で最初に用いて活躍したのも1970年代に活躍した中国の許紹発である。

2018年のジャパンオープンで優勝した張本、伊藤のコピー選手はすでに中国に何人もおり、両者の弱点を徹底的に研究しているに違いない。また、中国ではすでに新しい用具、技術をひそかに開発しているかもしれない。中国選手に再び勝ち、真に中国に勝利するためには、本人の努力だけでなく、組織的な対策、中国の研究を上回るスピードでの進化が必要である。日本には若手の有望選手が多いので、まだまだ伸び代が大きい。2020年の東京オリンピックが楽しみである。